

# 「大坂の史跡を訪ねて」

連載17回目

～土佐堀川・堂島川周辺 その5～

おきたに よしはる  
長谷 吉治

▶これまで2回、寄り道して淀屋橋を南下し「御堂筋周辺」をご紹介いたしましたが、今回は元に戻り「土佐堀川・堂島川周辺」をご紹介いたします。

## ①旧鴻池家本宅跡

中央区今橋2丁目4

▶連載14回目に紹介いたしました「彦根藩蔵屋敷跡」から土佐堀通り北浜2の交差点を南に2筋目を左(東)に折れます。そこから2筋目の四つ角の手前に大阪美術倶楽部がありますが、その建物前に「旧鴻池家本宅跡」の碑があります。



幕末期の鴻池家



大正期の鴻池家

鴻池家始祖は、戦国武将尼子氏に仕えた山中鹿之助の次男 山中新六幸元という人です。尼子氏滅亡後、伊丹にて酒造業を始め、初代鴻池屋新六と名乗ります。「鴻池」は地名から取ったといわれ、今でも伊丹市に鴻池という地名があります。その後、大坂に3店舗を構え、海運業に手を広げます。

新六の死後、七男 新右衛門が伊丹の本宅を、八男 善右衛門正成が大坂の店舗を継ぎました。この正成が初代の鴻池屋善右衛門です。

初代善右衛門は、明暦2年(1674)より両替商を手がけ、両替商としての鴻池屋がスタートします。大坂の「十人両替」にも名を連ねることとなります。

当時の十人とは、次のとおりです。

天王寺屋五兵衛	新屋九右門衛	鍵屋六兵衛	坂本屋善右衛門	天王寺屋作兵衛
新屋左右衛門	泉屋平兵衛	誉田屋弥右衛門	鴻池屋善右衛門	助松屋理兵衛

さて、JR学研都市線に「鴻池新田」という駅があります。

3代目の鴻池屋善右衛門宗利が宝永2年(1705)4月に今の東大阪市・大東市あたりの沼地の開墾に着手し、3年かけて新田を開発します。その功績により「鴻池新田」という名称を得ることとなりました。

### <新選組と鴻池屋>

文久3年(1863)4月、新選組(当時は「壬生浪士組」という名称で、「新選組」はこの年8月18日の政変以降に名乗ります)の局長 芹沢 鴨が7人の配下(永倉新八著の「新撰組顛末記」によると、山南敬助、永倉新八、原田左之助、井上源三郎、平山五郎、野口健司、平間重助)を引きつれ、金の調達のため京から大坂へやって来ました。そしてこの鴻池屋へ金二百両の借用を申し込みに行きましたが、店の手代が応対し、わずかな包金で帰らせるつもりが、芹沢は京都守護職を笠に着てあくまでも二百両を言い張ります。鴻池屋が奉行所に訴えると、逆に「壬生浪士は丁寧に扱え」と言われ、主人 善右衛門自らが陳謝し二百両を貸し与えます。この金で京の大丸呉服店で隊士の制服を注文します。その後、これを聞いた京都守護職 松平容保は「二百両を用意するので鴻池屋に返却するよう」と命じ、すぐに返済します。鴻池屋もすぐに返済されると思ってもおらず、新選組をこの後信用し、金銭面の支援をすることとなります。この時の善右衛門は10代目鴻池善右衛門幸富です。



### ② 少彦名神社

すくなひこなじんじゃ

中央区道修町2丁目1

道修町で開業した名医 北山寿安は、父である栄宇が中国から持ち帰った中国薬種の神様「神農像」を大切に祀っていました。寿安の死後、道修町の人々がこの神を祀ろうとし、日本の薬の神様少彦名神分霊を京の五条天神からいただき、ここに安置したのがこの神社の始まりです。



文政5年(1822)コレラが大流行し、コレラの当て字に「虎列刺」を用いていたことから「虎頭殺鬼雄黄丸」という丸薬を考案したところ大当たりしました。

以後、その宣伝に「張子の虎」を作って魔除けになると言い触らしたので、現在でも11月22日・23日の神農祭で「張子の虎」を求める人でにぎわいます。

境内には「春琴抄の碑」もあります。谷崎潤一郎の有名な小説「春琴抄」ゆかりの地でもあります。小説の冒頭に「春琴、ほんとうの名は鴈屋琴、大阪道修町の薬種商の生まれで歿年は明治19年10月14日(以下省略)」とあります。